

「全鍍連」 2018年8月号 巻頭言

全鍍連 技術委員会担当副会長 神谷 篤 (有)竹田鍍金工業 代表取締役社長)

「全国めっき技術コンクールと技能検定試験」



技術委員会担当副会長の神谷篤です。平素より全鍍連活動にご支援ご協力賜り心より感謝申し上げます。今年度全国めっき技術コンクールにも多くの参加ありがとうございます。昨年度は応募数538件というたいへん多くの参加をいただきました。無電解ニッケル、硬質クロムと二種増えたとはいえ500件越えに委員会、審査員もうれしい悲鳴をあげています。優秀作品のめっきの表裏膜厚の誤差のなさ、研磨技術のすばらしさ、年々技術の進化を目の当たりにしています。無電解ニッケルに至っては上位製品の膜厚誤差は1/10ミクロン台に何社も入る激戦でした。現在百数十社の参加企業数ですが300社を超すと総理大臣賞も夢ではないとお話もあるようです。

さて、同時期に全国ではめっき技能検定が行われています。全鍍連は直接関係はないのですが技術担当としては多少係わりがあります。技能検定は厚生労働省が定めた実施計画に基づいて試験問題等の作成については中央職業能力開発協会が担当し、委託を受けて各都道府県鍍金組合が試験の実施、検定を行っています。試験には等級があり、それぞれ学科と実技でめっき処理と液分析があります。この実技試験では亜鉛めっきはシアン浴、六価クロメートを使用しています。ところが現実の私どもめっき業の現場では主力はジンケート浴と三価クロメートがほとんどです。現実と試験が必ずしも同期していないことがここ数年議題に上ってきました。しかしジンケート浴や三価クロメート液を私どもが試験会場で建浴することは相当ハードルが高く、またそれぞれの試験会場で同一性能がだせるかという問題もあります。

「均一膜厚性のすぐれた液でめっきをつけ、出来上がっている三価クロメート液で処理することが果たして技能検定と言えるか？」

「企業現場で亜鉛めっき治具をつくる作業がどれほどあるのか？」

「クロムめっきもいつまでも六価クロム浴で良いのか？」

様々な議論が繰り返されています。

環境負荷や人体への影響から世界的にこのように変化してきたことは当然のことであり、正しい方向であるとは認識していますが今更ながらシアンもクロムも安価で高性能、高機能なすばらしい物質であることを再認識させられます。ものづくりの一翼を担っている私どもも環境問題を考えつつ、良い製品を作っていくことが命題となっていることを肝に銘じ日々進化していきたいものです。